

# 「人にやさしい東京」をめざして

## 都政で実現をめざす4つの柱

宇都宮 けんじ

1300万の人たちが暮らし、働き、学び、育つ、東京。

私は、東京の持つ大きなポテンシャルを考えたとき、都知事が本気になって人びとの生活と社会のために働けば、どれほど大きな貢献ができるだろうと考えてきました。

さる11月6日に公表された「新しい都政の実現を求める声明」に、私は名を連ねました。私がつくりたいのは、まさに「人にやさしい東京」です。

私は、多重債務の問題をはじめとして、弁護士として貧困の問題に長くかかわってきました。リーマン・ショックのあった2008年の暮れから翌年にかけておこなわれた「年越し派遣村」では名誉村長をつとめ、その後、完全無派閥の弁護士としては初めて日弁連会長となり、人権擁護活動や、東日本大震災と原発事故の被災者・被害者支援などに取り組んできました。

やさしさこそ本当の強さだと、私は確信します。「上から目線」ではない、人にやさしい東京——。その実現のために、皆さんとともに働くことを、私は決意しました。

## ◆東京を変える4つの柱の実現をめざします。

### (1) 誰もが人らしく、自分らしく生きられるまち、東京をつくります。

貧しい家庭で育った私は、誰もが人間らしく、そして自分らしく生きられる社会にしたいという思いで、弁護士になりました。「何が無駄とってまず福祉」という姿勢の前都政のもと、破壊されてきた東京の「生きやすさ」を、私は再建します。

私は、若者もお年寄りも、女性も男性も、障がいのある人もない人も、みんなが参加できるまち・東京をつくります。雇用の拡大のための施策、失業時の所得保障を充実し、人間らしい働きかたのできる東京をめざします。

私は、高齢者や収入のすくない人、自営業者にさらに負担を強いる消費税引き上げに反対します。東京にシャッター街は似合いません。

大規模再開発などの支出を見直し、福祉・医療を充実できる財政を確立します。

### (2) 原発のない社会へ——東京から脱原発を進めます。

絶対に繰り返してはいけない原発事故。大消費地として東京は、福島原発事故にも少なからぬ責任を持っていると私は考えます。福島をはじめとする被災地への支援のために、自治体としてできるあらゆることをおこないます。これまでのように、事故などのリスクを他県に押し付けながらエネルギー供給を得てきた構造そのものの見直しを進め、再生可能エネルギーの普及など、脱原発のために東京都ができるあらゆることを、都民の参加と知恵を得ながら検討し、実施していきます。

### (3) 子どもたちのための教育を再建します。

私は、自由と自治の気風があふれる東京の学校を再建します。教育現場が自由であるほど、子どもたちにとっても良好な教育環境と成果がもたらされることは、諸外国の例を見ても明らかです。前都政が進めた「日の丸」・「君が代」の強制によって、多くの教育関係者が言葉に表せない苦しみを強いられてきました。私は「上から目線」の教育の統制に反対し、自由で生き生きした教育をつくります。学校選択制などで競争をあおるのではなく、着実な教育インフラ整備をはじめとする、子どもたちにあたたい教育行政に転換し、いじめ問題の解決に取り組みます。

#### (4) 憲法のいきる東京をめざします。

憲法は法律家としての私の原点であり、戦後日本の平和の基盤となってきた宝です。私は憲法「改正」に反対します。前都政では、アジア諸国をはじめとする都市との交流は停滞しました。私はそれをすぐに再開します。沖縄の人々とともに、自治をまもる立場からも、普天間基地の辺野古移転、欠陥機オスプレイの配備は認めません。米軍基地のない東京をめざします。

憲法9条とともに、憲法25条は、「反貧困弁護士」としての私のライフワークです。

#### ◆都民みんなの声に耳を傾けて、「東京の難問」の解決をはかります。

4期つづいた石原都政のもとで、都政には課題が山積しています。

オリンピック招致、築地移転問題、新銀行東京、尖閣諸島買収で集めた寄付金の処理など、前知事が突然、放り出してしまった課題は、「強いリーダーシップ」という名のもと、都民の声に耳を傾けない強引な施策によって引き起こされてきました。

「解決」を押し付けることは、本当の解決にはなりません。私は、パブリックコメントはもちろん、タウンミーティングなどを積極的に開催し、住民参加のもと、実質的な議論を丁寧に進めて、着実に解決していきます。それこそが、自治とコミュニティの中で求められる本当のリーダーシップだと考えるからです。

東京は変えられます。人と人が支えあう、もっとあたたかい社会に変えることができます。誰かが変えるのではなく、私たち自身の手で、変えることができます。それが今度の都知事選挙なのではないでしょうか。

# 宇都宮けんじさんって、どんな人？

## ◇弁護士になるまで

- ・1946年、愛媛県東宇和郡（現西予市）明浜町田之浜という小さな漁村で生まれました。夏は朝から晩まで海で遊びまわる毎日。小3の時、家族で大分県の国東半島へ開拓農家として移り住み、貧しくても懸命に働く父親の姿を見て育ちました。
- ・熊本で中学（西山中学）、高校（熊本高校）を過ごす。野球と卓球が得意な少年でした。
- ・大学（東京大学）時代、卓球部で汗を流す一方、『わたしゃそれでも生きてきた』（東上高志）、『小さな胸は燃えている』（芝竹夫）という二冊の本から大きな衝撃を受けました。豊かとは言えない自分の家よりもずっと貧しい人たちの存在を知り、社会のために働こうと弁護士を志しました。

## ◇弁護士時代

- ・他の弁護士の事務所で居候して働く「イソ弁」生活が計12年と長く、しかも事務所を二度クビになりました。自称「落ちこぼれ弁護士」です。
- ・その下積み生活の中で、多くのサラ金・ヤミ金被害者の方たちと出会い、その被害救済に尽力してきました。さらに法律そのものの改正にも取り組み、2006年には、いわゆる「グレーゾーン」金利を撤廃させる画期的な貸金業法改正の成立に尽力しました。
- ・作家の宮部みゆきさんが書いたベストセラー小説『火車』に出てくる弁護士のモデルにもなりました。宮部さんがこの小説を執筆するにあたり取材も受けており、宮部さんとは現在も交流があります。パレンタインダーのチョコをもらったこともあるそうです。

## ◇日弁連会長から社会問題への取り組み

- ・2010-2011年度にかけて、3万2000人の弁護士を束ねる日弁連の会長をつとめました。会長選挙では無派閥の候補として初めて勝利。派閥推薦候補が弁護士人数の多い東京・大阪の弁護士会で派閥票を固める中、若手弁護士の支持を横断的に集め、接戦の末、史上初の再投票で勝利しました。
- ・日弁連会長在任中に起きた東日本大震災。被災者・被害者支援の先頭に立って取り組んできました。
- ・「反貧困弁護士」との異名をとるほど、広がる貧困・格差問題に積極的に取り組んできました。反貧困ネットワーク代表であり、派遣村名誉村長でもあります。
- ・脱原発法制定全国ネットワークの代表世話人もつとめています。
- ・オウム真理教犯罪被害者支援機構理事長。オウムに殺されてしまった坂本弁護士の奥様は、宇都宮さんの弁護士事務所のスタッフでした。
- ・こうした活動について執筆した著書も多く、『弁護士、闘う』（岩波書店、2009年）、『反貧困の学校 貧困をどう伝えるか、どう学ぶか』（共編：明石書店、2008年）など多数。
- ・愛読者は藤沢周平、それに宮部みゆきさんの本です。